
とあるカメラの絶対零度 アブソリュート ゼロ
扉。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるカメラリアの絶対零度 アブソリュート ゼロ

【Nコード】

N8982Y

【作者名】

扉。

【あらすじ】

レベル4である柊 千景はロリコン×3とショタコンのいる個性丸出しの暗部に所属していた。

裏で業務をこなしながら人間性を高めていくらしい。

コメディーがほとんどになるけど……。

なんとかなるっ！！と大空に叫ぶ千景であった。

そして、千景も実は……

キャラ紹介 インTRODクション (前書き)

この小説は半年前ほど書いていて
つい先ほど、フォルダから見つけました。

どうせなら、話を書いてみよっつてことになったので
ぜひ拝聴お願いします。

キャラ紹介 インTRODクション

名前 柊ひいらぎ 千景ちかげ

身長 160cm

年齢 16歳

容姿 朱色しゆしゆの髪に少したれ目

特徴 ツツコミ役 千景以外がボケ

能力 アブソリュートゼロ
絶対零度

学園都市の暗部 【グループ】に所属している普通の高校生
レベルはレベル4
グループで海原同様、常識を持った人物

成績は優秀であるが、なまけ癖がある為よく小萌先生に呼び出されている。

上条当麻 土御門元春 青髪ピアスと並んで要注意人物にしている。

恋愛関係には興味はないが他人の恋愛が大いに協力するタイプ

【カメラリアコンプレックスサヴァンシンドローム】

通称【カメラアモード】

困った女性や助けたいと思う執念により覚醒するモード。
簡単に言くと緋弾のアリアのHSSみたいな感じ。

しかし、キザにはならない。

【ハザード
シグナル危険信号】

自らの体を酷使し続けることで使える、いわば最後の切り札。これを使うと意識が飛び、背中から氷の翼が出現するとか。千景は知らない。

第1話 マフラー男 ヒイラギ チカゲ (前書き)

千景 「これから始まります」

一方通行 「ぜひ見てくれよなア」

淡希 「私と千景の絡みにも注目よ」

元春 「気に行ってくれたら感想やお気に入りもよろしくだにゃ」

光貴 「今回は出番なしですか」

第1話 マフラー男 ヒイラギ チカゲ

1

「お、お前……何者だ!!」

数十人いる警備隊の中から1人が叫ぶように言った。

ここはとある研究所。

内部を見てみると恐ろしいことに全てのコンピューターが機能を失っている。

緊急警報と書かれてある巨大モニター以外は……

「いや……だから……あれっすよ。あれ」

警備隊と対して向かい側に立っている少年

柊 ひいらぎ 千景 ちかげは頭を掻き

ながらそう言った。

「何が言いたい。ここをどこか知って侵入したのか?」

「ここはどこかって? そりゃ知ってて侵入したに決まってるんだろ。

俺は銀髪ロリコン野郎や、金髪ヤンキー風ロリコンや……あれ、俺さつきから

ロリコンしか言ってるねえな」

「ふ、ふざけるな!!」

1人が拳銃を向けると一斉に銃口を向ける。

リーダーと思われる者は1番後ろで指示をしているようだ。

「いや、ふざけてないっすよ。いるんですよ世の中には……なんでしたっけ?」

ロリ……………ロリータ……………まあ、いいや。後で聞いてみよ
「話はそれで終わりか？」

「おっ！？ あんたがここの指揮官ですかい」

「ああ、私達が相手となると貴様もすぐにあの世行きだぞ」

「まじですか？ 天国行きのチケットか……………欲しいな」

「欲しい？ 何を今さら、今すぐにもくれてやるわ やれっ

！！」

リーダーがそう言うと、一斉に渴いた銃声が鳴り響く。

数十秒もの間、止むことのない銃声。

千景の姿は煙に覆われた。

「ふっ……………いい気になるなよ。この若造が」

リーダーがそう言い捨てて、帰ろうとした時 煙の中から咳のする音が聞こえる。

「げげげほ……………止めてくれって……………俺、煙とか無理なんだよ。マジで……………だから将来は絶対にタバコとか吸わないって……………決めてんだから」

千景の可笑しな告白に、カミングアウト耳を向けず警備隊は交代に撃ってくる。

「やれやれ……………困った人達だ。そろそろ、終わりの頃かな」

千景はそう言うと、欠伸をして首に巻いてある白色のマフラーをまき直した。

「アブソリュートゼロ
【絶対零度】」

地面に触れた途端、氷が生きた生物のように警備員達に襲い掛かる。2分もしない内に人々は凍りついた。

「えつと……なんだっけ？ たしか……これを壊せばいいのか？」

千景は徐に近くにあつたPCへ近づく。

ちよんと軽く触れた瞬間、PCは粉々に消えていった。

「では、この辺で。チャオ」

千景は研究所の扉を閉めた振動で研究所内のコンピューターや警備員は粉々に散っていく。

最後には研究所自体を巻き込み、跡形もなく氷の残骸と成した。

柊 千景は絶対零度の能力者である。

2

仕事を早々に終わらせた千景はスーパーでご飯を買い自宅へと足を

運ぶ。

千景の学生寮には不幸で知られている少年がいる。

上条 当麻
かみじょう としま

彼もまた、幸運に恵まれず、不幸を寄せ付ける体質を持つ。

千景は不幸ではないが自身の能力のせいで体温が常に低い。

プールではしゃぎ過ぎて、上がった後に唇が青い 感じの状態が常にである。

その為、千景は気温30。を越えた密集地であろうが、絶対に外すことはない。

本人はトレードマークの一種として扱っている。

「あ あ。めんどくさな 。」

スーパーの袋を持ちながらトボトボと帰る途中、千景は眠い目を擦って歩いた。

現在の時刻は午前9:30

千景は朝帰りなのである。

高校生なのに。

「まったく1番熟睡してるときに起こしやがって……」

目の下にはクマがあり、どうやら無理やり起こされたと予想がつく。千景は欠伸をしながら扉の前に【柵】と書かれたドアを開けた。

「おかえり」

「おかえりだにや」

「よオ おかえり」

千景はドアの前でレジ袋を落とした。
立ち尽くしている千景に土御門 元春が近づいて言った。

「お、これは、これは朝からご苦労様だにや。」

「それにしても、この部屋熱いわね」

「そうだな……。おい、クーラーのリモコンってどこにあんだ」

ぴくぴくを肩を震わせる千景。

千景の買ってきた朝飯は土御門によって食された後であり、結標淡希と一方通行は

クーラーのリモコンを催促している。

「て、てめえら……。人が朝帰りで帰って来てなのに……。呑気に団欒ですか。このやろ」

「ああ、それよりクーラーのリモコンどこだア？」

「クーラー？ あいにく俺は年中涼しいのでクーラーなんてねえんだよ！ー！ ロリコン風情があああー！ー！」

千景は部屋中を冷気で包み込む。

すると一方通行は氷のベクトルを変え、結標は【ムーブポイント座標移動】でどこかへ姿を消し、土御門は

腹を押さえながら凍りついた。

「はあ……。はあ……。」

「おいおい。いきなり能力とは流石はレベル4さんですねエ」

「てめえ……。ケンカ売ってんのか？ 今となつては能力も満足に使えないただのロリコン野郎が……。(ふっ)」

「てめエ。鼻で笑つたなア……。いいだろう、1位の実力見せてやるよオ」

千景と一步通行は両者の首元を掴んだ。
にらみ合い。

そして、相変わらず土御門は凍っている。

「まあまあ……。その辺にしておきなさい。近所迷惑よ」

「大丈夫だ。俺の隣の家は土御門の部屋だ」

「ならもう反対側の人に迷惑よ」

「いや、もう片方の住人は誰もいないから大丈夫だ」

「なら……。いいわ。好きにやりなさい」

「なんで、てめエが指図してんだア」

結果は言わずとも知れず。

千景はぼこぼこにされてベッドで横になっていた。

「もうヤダ……。もう抜きたい」

「そんなこと言わないで。ほら、今度ファミレスで何か奢ってあげるから」

「しゃねな、俺からはこのしゃし」

「いらねよ。誰がラストオーダーの写真なんているか。俺はロリコンじゃねえんだよ」

「じゃあ、俺からはこのしゃし」

「だから、俺はロリコンでも義妹に萌えたりする特性もないの!!
普通なんです!!」

一方通行と土御門は自分のお気に入り写真の写真を断られて手がぶるぶると震えている。

千景は枕に顔を当てながらそう言った。

「そういえば、海原はいないようだな」

「あいつなら、今 別件で動いているらしいわよ」

「あ 。また、俺1人にしよい込ませる気か。あの偽海原が」

千景はそういうと足をばたつかせた。

結標はゆっくりと千景の背後によって行きそのまま飛び乗った。

「ぐぐしっ……！」

「あら、ごめんなさい」

「お……お前……絶対にワザとだろ」

「ワザとよ」

「くっそ……このシヨタコンが……」

しばらくすると千景の顔が少しずつ赤く染まっていく。

これは結標の大きな胸が密着しているからであり、結標は計算づくでやっている。

「あ……あの……む、結標さん？」

「あら、なにかしら」

「そろそろ、どいてもらえるとありがたいのですが？」

「そうね……。まあいいわ、今日は千景の赤くなった顔が見れて十分よ」

結標はそう言うのと千景の上から離れていき、冷蔵庫にあったお茶を取りに行った。

土御門と一方通行はにやにやとしている。

「あ？ ロリコンブラザーズ 2人共。どうした？」

「誰が、ロリコンブラザーズだア……！」

「俺は否定しないにや」

「まあ、野暮な話はこれくらいにしてそろそろ本題に入ってもいいんじゃないのか？」

張りつめていた空気が一層張りつめられる。

一方通行はゆっくりと話を始めた。

「次の仕事だ。今度は結標と千景に行ッてもらおう」

「また俺かよ。めんどくせえな」

「で、内容は？」

「それが、めんどろな事になったにや」

「面倒な事？」

「ああ。どうやらこの前潰したチームの生存者がいたらしい」

「この前って……ああ、あのよわっちいチームの」

「そうだにや。しかも、その残っていた奴がなんとレベル4なんだにや」

「そりゃあ、めんどくさい。でも、一方通行が行けば速攻だろ？」

「俺は別件で呼ばれているからなア」

「俺も別な用事があるにや」

「いや、元春はあれだろ？ 補習だろ？」

「正解だにや。流石、ちーやん。頭いい！！」

「いや、お前らがダメなだけだ」

一通りの会話を終えた4人はそれぞれの家へ帰ることになった。

最後に部屋をでた結標が千景に声を掛ける。

「今日は楽しかったわ」

「俺は全然だけどな……」

「まあいいわ。明日、また会いましょう」

「じゃあな」

千景は結標が見えなくなるまで見送った。
姿が見えなくなると千景はため息を付いて部屋に入る。

「で、明日の集合場所なんだけど」
「お前もつ帰れやあああああああああああ！！」

【座標移動】した結標が部屋に堂々座っている。
それを見た千景が思わず叫んだ。
その声は学生寮中に響いたと後に噂されていることを千景はまだ知らない。

3

14

千景「ここで次回のタイトルコールをするらしい……めんどくさっ
！！

次回！！ 第2話

ミサガミコト
超電磁砲

え？ これも読むの？ えっと、こゝ愛読ありがとうございます
しました！！」

第2話 超電磁砲 ミサカ ミコト (前書き)

千景「この話は基本的に原作ブレイクしてるので今は9月初旬」

淡希「本来なら、私は残骸を狙レミナントっている頃ね」

千景「そうだ。まだ、グループなんて結成してない頃だしな。

まあ、その辺は小説なので大目に見てやってくださいいな」

淡希「それでは第2話をご覧くださいね」

第2話 超電磁砲 ミサカ ミコト

1

千景と結標は現在レベル4の消し損ねた者を捜索している。先ほどまで目の前にいたのだが、結標がキレて何処かへ飛ばしてしまったのだ。

「本人も行き先が分からねえってどんな能力だよ」

「べ、別にいいじゃないの。それよりも早く見つけるわよ」

自分の過ちに気づいた様子の結標は顔を少し赤らめて千景に謝った。今は人通りの多い場所へ来ている。

草木を隠すなら森の中 火を隠すなら燃え盛る火炎の中
ロリコンを隠すにはロリコンの中といった具合である。

「それにしても……いねえな」

「たしか服装は上下黒の奴だったわよね」

「ああ、たしかそうだった気がする」

簡潔に単純に会話を終えると、千景と結標は再び捜索に入る。まだ相手の能力も分かっていないので警戒は怠っていない。

「それにしても暑いわね」

「俺はサブいけどな」

「もう9月なのに、そろそろ涼しくなってもいい頃なのにね」

そう言った結標は軽装備な学ランをばたばたと仰ぐ。

千景は探すふりをしてこつそりその姿を見ていた。

（はっ！？ 違う。俺はロリコンじゃねえ！！ あ、でも淡希は歳上だからむしろセーフ！？）

千景は1人で考え込む。

その横顔を結標は首を傾けて眺めていた。

2

結局、いつになっても見つからず結標は少し涙目になっていた。
千景はさり気なくフォローを入れつつ搜索を続ける。
すると、ある疑問点が浮かび上がる。

「お前の能力つてさ、別に手を触れなくても使えるんだよね？」
「ええ、それが私の【ムーブポイント座標移動】ですもの」
「それなら、ここにそのレベル4を呼び出せばいんじゃないか？」
「あ……………」

その手があったと言わんばかりの顔をする結標。
呆れた。お前の知能も俺の賢さもその程度だったってことだと頭を
押さえる千景。

「じゃあ行くわよ」

「ああ……一発で決める」

結標の合図でレベル4は姿を現した。
空中に飛ばされた為、移動は困難である。
千景はレベル4に憶測を合わせると小声で1言いった。

「フリージング【氷結】」

その途端、張りつめていた空気が一気に弾けたようにレベル4は空中で凍った。

【氷結】フリージング

千景の持つ【絶対零度】アブソリュートゼロの応用。

他にも剣、槍、斧 e t c … の攻撃用もあれば防御用の技もある。
今回の技は相手の内部にある水分の約半分を凍らせることにより可能な技。

しかし、これには高度な計算が必要である。
間違った計算をすれば、可笑しい状況に陥ってしまうのは目に見えている事。

「なんだよ。もう終わりか？」

「レベル4といっても私達とはずいぶん違うわね」

「まあな。俺達は5に近い4。アイツはきつと3に近い4だったんだろ」

「今日はもう帰るのかしら？」

「そりゃあ……この時間だしな。夕飯の準備しないと」

「そ、そう。千景が良いなら良いんだけど………そ、その
「なんだよ。こいつを俺に運べと？」
「いや……そういう事じゃなくて と、いうよりそれは私の能力
でいくらでも可能だから………」
「そうだったな………で、話って？」
「えつと………その。もし、もしよかったら夕ご飯作ってあげよつか
なあって………」

ひゅっ

千景はマフラーを強く巻いた。

結標は顔を赤くしてもじもじとしている。

「ん？ まあ、いんじゃないか」

「ほ、ほんとかしら？」

「ああ、別に1人で食うより2人で食べたほうが美味しいもんな」

「そ………そうよね。じゃ、じゃあ私は先に帰ってご飯の用意しとく
わね」

そう言っつて結標はレベル4を連れて飛んで行った。

背筋が震えたので形見を狭くして帰ることにした千景。

とぼとぼと1人、今は使われていない空き地を出るのであった。

3

再び人通りの多い所へとやって来た千景。

しかし、その表情は少し青ざめていた。

「失敗した。俺って人込み苦手なんだよね……」

うつぷと吐きそうになるのを押さえて先へ進む。

すると、誰かとぶつかってしまった。

「す、すみません」

「いえ、こちらこそ　　っってお前はビリビリ中学生!？」

「へ? あんたは千景!！」

「おい、一樣俺先輩だぞ!!　1年お前より早く生まれたんだからな」

「別にいいのよそんなことは!!　それと私はビリビリ中学生じゃなくて御坂^{みさか}美琴^{みこと}って名前が　　って待ちなさい!!　どこへ行こうって言うの?」

「俺人込み苦手　そして、お前も苦手。だから帰る」

「ちょ……待ちなさいよって!!」

御坂の放った電撃は地を這って千景へ襲いかかるうとする。

千景はそつとしゃがむと這ってきた電撃にそつと息を吹きかけた。

「【凍りの息吹】^{アイスブレス}」

カチカチカチ

音を鳴らして御坂の電撃は凍っていった。

「なんなのよ、毎回!!　あのシンシン頭と良い、このオレンジ髪
と良い　　」

「じゃ、そゆことで」

「ちよ ホントに待ちなさいって!!」

「俺、ロリコンって思われたくないからさ」

「別に……誰がロリータじゃ!!」

怒り狂う御坂を置いて千景は自宅へと足を速めた。

その結果が不幸を呼び寄せたあの少年と出会うなんて誰も予想していなかったであろう。

4

もう少しで学生寮だという所で千景は不幸少年 上条当麻と出会った。

「おお。誰かと思ったらレベル4の柊くんじゃないですか!!」

「誰かと思ったら異端中の異端の上条くんじゃないですか!!」

パンっ

お互いに手を叩いた。

千景は当麻のことを信頼している。

誰よりも 表の人間の中では。

「どうしたお前、今日はあれか……補習か？」

「まったくそうなんだよ。上条さん困っちゃっぜ」

「はは、まったくだな」

「そっいうお前は？」

「え？ 俺か。俺は……まあ1日その辺をうろついていた暇人だ」

「そうか、いいよな」

日が落ち始めている頃、千景と当麻は夕日を眺めていた。そしてその行動をした後、現れたのだ

「み つけた!!」

最強の超能力者（レベル5）の御坂 美琴が・・・

「よくもさつきは無視してくれたわね おっと、私の気に入らないやつトップ2が、一緒にいるとは……」

「どうする当麻」

「・・・逃げるが勝ちだ!!」

ダッシュで逃げ出す千景と当麻。

「ちょ……待ちなさいよ !!」

「不幸だああ!!!!」

「そうだな……俺も口癖を考えないとな」

御坂から逃亡中に千景は口癖を考えるのに必死になっていた。

当麻は千景より先に逃げるが色々な障害に出くわして最終的には千景より遅く 御坂に近い場所で逃げていた。

「思いついた!! 『俺に触るとめっちゃ涼しいぜ!!』。どうだ当麻？」

「いや……それってただのセリフじゃん。口癖でもなんてもねえよ」

いつの間には裏路地に入ってしまった千景と当麻。
案の定、先は行き止まり。目の前には壁。後方には化け物（御坂美琴）がいる。

「どうすんだよ当麻！！」

「知らねえよ。お前レベル4だろ。この九死を回避してくれよ」

「ふふふ……追いつめたわ。死になさいっ！！」

びん

一枚のコインを弾き、そのまま撃ちだした。

ぱりん

一枚のコインは何かを壊すような音を立てて静かに地面へと転がっていく。

千景の前には当麻がいた。

そう当麻は異端中の異端。

【神】^{かみ}に愛されなかった【上】^{かみ}

その右手に宿るのは能力や魔術。この世で普段は在りえないものを打ち消す右手。

『イマジンブレイカー
幻想殺し』

「ちょっと……なんであなたは私の能力が効かないのよ」

「そりゃあ……わからねえよ」

「今の内だ。逃げるぞ当麻」

【床】^{フロア}「

「ちょ……あ　も　。　今度会ったら承知しないからね　！
」

千景と当麻は危機一髪の所で御坂からの脅威を避けた。

空気中に床を作り、それを滑って行って2人は無事に帰宅を終えた。

その頃には時刻は8時を大いに超えているのが分かった。

ちなみに結標と仕事を終えたのは5時。

勘のいい方ならわかっている通りの結末であった。

千景はその後、結標から多大な攻撃を喰らい

しばらくの間立つことも間々ならなかったという。

5

結標　「はぁ……千景は一向に振り向いてくれないわね……。いつ

そ毒でも盛って

次回 愛の料理 お楽しみにね

第3話 愛の手料理 あわきのてりよつり (前書き)

千景「今日は作者の誕生日ということとで急きよ更新!!」

神裂「私のような者がこんな場へ出ても構わないのでしょうか？」

千景「いや、そんな大層な場所じゃねえから」

神裂「そうですか……では、第3話 始まります」

第3話 愛の手料理 あわきのてりょうじ

1

料理。

一般的に女性が男性の為に作る愛情表現の一種である。

べたべたに下手くそでもかえって男性の心をGET出来る可能性の高い品。

練習に練習を重ねれば、どんなに下手くそでもきつと上手になるはず なのだが。

「うん。美味しくできないわね」

ここにいるさらに学ランという男心を別の意味でGET出来ると思われる女性がいた。

むすじま
結標 淡希

彼女は只今、自宅にて料理の特訓をしていた。

と、言うのは昨日 千景が御坂に追われたおかげで超ご立腹の結標は

作っておいたご飯を投げ飛ばし出たのである。

その後、千景からのメールで謝罪の文と思い、携帯を開くと

『お前……料理下手くそだろ』

と、言う女性には最悪のボディブローが決まったのであった。その後、結標はスーパーへ行きありったけの材料を買い込んで

今に至る。

「それにしても……あのメールは流石に堪えたわ」

あのメールを見た結標は3時間立ったまま気絶していた。
最後は絶望のポーズまで行ったという。

「よしっ！！ 出来たわ。これで千景を……ぐふふ」

暗黒のオーラを纏っている結標であった。

2

千景は只今、窓をながめていた。
現在は授業中。

寝ている者もいれば、必死にノートを書いている者もいる。
授業をしているのは小萌先生。

黒板に手が届かない為、補助イスを使って書いている。
それをずっと眺めている青髪ピアス。

寝ている土御門、必死に食らいつこうとしている当麻。

(あ。今日も平和だな……)

千景が唯一心許される場所。

いくら暗部に関わっているとはいえそれは裏面上。
表面は普通に学生として通っている。

きんこんこん

聞きなれたチャイムの音と同時に小萌先生は授業を終え、教室を出る。

「柊くん、柊くん」

「なんだよ青髪」

「小萌先生むっちゃ可愛ええな」

「また、それかよ……」

「そっや」

それから次の授業が始めるまで永遠と小萌先生の話の話を聞かされた千景であった。

千景は呆れた顔をして、今日の学校は無事に終わったのであった。

3

帰り道 千景、当麻、土御門、青髪ピアスで帰っていた。

「なあ、千景」

「なんだ？ 当麻」

「どうしたにや」

「まさか、女の子紹介してくれるとか思ってますん？」

「ちげえよ。上条さんだって出会いが欲しいわ！！」

軽率な発言をしたため、当麻は土御門 & a m p ・青髪ピアスに殴られた。

千景は呆れた表情で見下ろすように当麻を見ていた。

「な……なにすんだよ　　！！！」

「かみやん。それは言っちゃいけないにや」

「1番女の子とフラグが立っているやんけ」

「まあ。当麻がこの中では1番だな……」

「そ、そんなことねえよ。ほ……ほら。千景だって妙に女の子と話してるし」

「そんなことねえよ。だってお前、あれじゃん。オルソラとか五和とかと仲良いじゃん」

「お前だって仲良いだろ。この前五和と買い物してただろ！？」

「げっ！？　お前、見たのかよ……」

「なんや、なんや。その子ら？　紹介してくれへんか？」

「そうだけお、2人で黙ってないで紹介してほしいにや」

当麻の『イメージブレイカー幻想殺し』ならぬ、【フラグメーカー女性落とし】

とうの本人はまったく気づいていないのだが……。

千景は欠伸をして、その話をスルーした。

千景はあまり恋愛感情というものがない。

土御門や青髪ピアスのように、常に女性を求めている人や

当麻見たく、気づいていない。

さながら千景は

【フラグメーカー恋愛興味なし】

と、言うべきであろう。

しかし、そのフラグに気づいていないのは当麻だけじゃないという

事。

千景は夕飯を買う為に3人と別れてスーパーへ向かった。

4

材料を買い、学生寮へ向かうと珍しい人物と会った。

「あなたは……」

「誰かと思ったら露出の多い 神裂 火織さんじゃないですか!!」

「あなたは私を怒らせたのですか?」

「いや……ちよっと待って!! 流石にお前と戦う勇氣は俺には無い」

「……なら、いいのですが」

「それにしてもどうしたんだ? あ、元春に用があったのか?」

「いえ、今回はあなたと上条 当麻に用があってきました」

「俺と当麻に?」

「はい しかし、立ち話もなんですから。どこかでお話したいのですが……」

「そうか。なら、俺の部屋でもいいか?」

「………そうですね。わかりました」

千景は少し顔の赤い神裂を後ろ目に自宅へ向かって歩き出した。
神裂は少し遅れて、千景の後を追う。

【柊】と書かれたプレーとの前に立ち、鍵を開けると千景の視界には普通ならいない人物がそこにはいた。

「あ、おかえり。千景」

千景は開けた反動を利用してそのままドアを閉めた。

(あれ……………なんで淡希がいるんだ？ 夢？ そうだ夢だ！！)

千景はそう思い、ドアを開けるがやはり現実だった。

ドアを閉め、頭を抱える千景。

横目に不思議がる神裂。

「あ……………あの。神裂さん」

「はい。なんででしょうか？」

「その話、メールとかでもいい？」

「え？ ま、まあ……………大丈夫ですが。詳しい話は向こうへ着いた時にお伝えすればいいので」

「ん？ まあ、いならいんだけどさ　　ごめんな」

「いえ、では失礼します」

深々とお辞儀をした神裂は、そさくさと帰って行った。

千景は少しの疑問を抱えてドアを開ける。

「なんで、お前がいんだよ」

「いやあね。昨日のリベンジよ！！」

「お前さ。1日やそこらで料理なんて上達ねえし」

「わかんないでしょ。ほら、座った、座った！！」

結標の言われるがまま千景は席へと腰を降ろす。

そして、出来上がった料理は壊滅的。
千景の生死をさまよう旅が始まったという。

5

「さて……………どうしたのですか」

神裂は自室のベッドの上で四天四刀を降ろしてそう言った。

神裂が思っていたのは新たな脅威。

ブリエステス
女教皇でありながら、その脅威には自分の力のみでは勝てないと憶測を置いていた。

「この状況を奪回できるのは、上条 当麻と柊 千景の力が必要……………ですか」

神裂は今朝早くに天草式十字凄教のある人物と電話で話していた。その脅威を知った。

「そう言えば……………柊 千景はメールをよこせと言っていましたね」

徐に携帯を開く神裂。

しかし、一向に打つ気配はない。

「思ったのですが、私はメールなど打つたことないのですが……………」

目を点にして操作を進める神裂。

その姿は女教皇でもなければ、世界で20人しかいない聖人でもなくただ機械音痴の女性にしか見えない。

結局、神裂はメールを打つのを諦めて、携帯をベッドへと置く。

「明日にはイギリスに帰らないといけないのですが……」

彼女に残された時間は残り数十時間。

その間に神裂は干景と会うことが出来るのであろうか？

「……その脅威の名は【ミクトランテクリートリ】」

行きとし生きる者を帰らざる者へと帰る悪魔。

その脅威は国を滅ぼすレベルまで及ぼうとしている。

絶対零度と幻想殺しは来る日 4/2のミクトランテクリート発生
から約、5ヶ月

9/15日。その日に来る脅威へと少しずつ近づいていくのであった。

神裂 「そ、そう言えば私……柊 千景のメールアドレスを知りませんでした。

結果、安心です 明日の早朝にでも電話をかけてみましょう。

次回 第4話 9月13日^{ロンドン}^へ みなさん、ぜひ見てください」

第4話 9月13日 ロンドンへ (前書き)

千景「4話更新!!」

当麻「上条さんは……まだ死にたくねえええ!!」

千景「あきらめ

」

第4話 9月13日 ロンドンへ

9月13日

日曜日、千景は時間遅れの朝食を食べていた。

ちなみに今の時刻は午後1:30

朝食というより昼食である。

「やっぱ、カレーは1日寝かせると美味しいよな」

千景は大きな圧力鍋に入ったカレーを取って食べる。

食べ終わった頃に大きな音が玄関前から聞こえてくる。

どたどたとドアを叩く音が聞こえる。

千景は『新手の勧誘かあ?』とドアを開けるといきよいよく当麻が飛び込んでくる。

「どうしたんだよ。当麻!？」

「い、いや……お、お前携帯って確認したか？」

「あ? 携帯は……あそこに」

ベッドの上にあった携帯を見ると赤いランプが点灯しているのがわかる。

千景はゆっくりと近づいて確認すると

「あ、今日ってスーパーの特売日じゃん。忘れてた、ありがと」

「ちげえよ!!! 他にもメール来てないか？」

「他にも……」

再び携帯を確認すると

「……………。これはまずいな上条さん」

「やばいですよね柊さん」

神裂からの電話が20件ほど連絡が来ていた。

最初に連絡が来たのは午前0時丁度、そこから1時間置きに連絡が入っている。

「か、上条さんは……………」

「俺の所には70件ほど……………」

「それはだいぶご立腹だな」

「ヘタすると2人共血の海を見ることになるぞ……………」

携帯を持ってあたふたしていると当麻はカレーを見つけた。

うるうるとチワワの目で見えてくる当麻を千景は呆れた顔で見ている。

「お前……………また食べてないのかよ」

「ああ、インデックスに根こそぎ食い尽くされてるからな」

「まあ、あれでいんなら食べてもいいぞ」

「ホントか!!」

千景がそう言った途端、当麻はカレーの鍋へ飛び込んで行った。

当麻は鍋のカレーを食べると、千景の部屋をでていこうとする。

「ちょ、ちょ。待って。ど、どうするんだよ」

「あ? ………………。あ。忘れてた。ど …… しよう!?!」

玄関前で騒いでるなんて、通報されそうだなと千景は心の中で思う。
当麻は相変わらず不幸少年だ。

「そ、そうだ。こつちから連絡を掛ければ……」
「駄目だ!! 最悪、死亡フラグがバキバキに立ってしまった」
「じゃあどうすんだよ!!」
「あ　　も　　。しらん。俺は寝るっ!!」

玄関のドアを閉め、布団に入ろうとした瞬間　　P r r r r rと

「と　　ま!! どうしよう。来ちゃったよ神裂さんから!!」
「どうすんだ!?! まずは1回切るか? それともでるか?」
「切る? 切っちゃっう?」
「切りますか?」
「いや、出よう。殺されたくないから」

千景はゆっくりと通信ボタンを押した。

2

「やっぱ出来ない!!」
「うっそ!? お前押したんじゃないのかよ!!」
「押せない。絶対押せないよ、怖すぎて!!」

それでもP r r r r r　P r r r r rと着信音が鳴り響く。

千景は震える。

震えすぎて、携帯の着信ボタンが押せないのだ。

千景は当麻を見る。

当麻も震えている　と、思いきやカレーを貪りつくしているではないか!!

「おまつ!?!　何食べてんだよ!?!」

「ぶあつ!?!　ばめろ。めじがぐべんだろ(止めろ、飯が食えんだろ)」

「そういう問題じゃねえって言うんだよ!?!　凍らせるぞ!?!」

「やつべびろ!!　ぼべぼ、びびででぶびべびびやびゆ。

(やってみる!!　俺の右手で打ち消してやる)」

「何言ってるかわかんねえよ!?!」

「(ごくつ)　まあ、とにかく出てみろって。もう5分もca

ーしてんじゃねえか!?!」

「あ……………」

「ど、どうした?」

「ボタン押しちゃった……」

「えええ!?!」

千景はおそろおそろ携帯に耳を向けると……

『まったく、あなたって人は!?!』

「……………」

『どうしましたか　。　柊　千景さん』

「ただいま、電話に出ることが出来ません。きっと柊さんはあなたに恐怖を覚えています。」

次に電話に出た時はきつと優しくしてあげてください」

『……………。そうですか、わかりました。次に会った時は血を見ることとなりますが……………』

「本当に申し訳ございませんでした、神裂さん　いや、神裂様！
！！！」

『いえ、そこまで言われる覚えはありませんが・・・』

千景は携帯に向かって見事な土下座を決めた。
当麻はそれを見て、失笑しているのがわかる。
後で凍らせておこうと思った千景だった。

「で、御用件はなんでございましょうか。神裂様」

『ですから！！　まあ、いいでしょう。とりあえず今から言

う空港へ来てください』

「はい、仰せのままに・・・」

土下座をしながら電話を切る。

千景はため息を付くと、ゆっくりと振り返って当麻を見た。

「……………おい！！　上条」

「……………なんででしょうか？　柊さん」

「凍らせていいか？」

「すいませえええええええん！！！！」

当麻を凍らせようと攻撃をしかける千景。

当麻はとっさに右手を使う。

千景は呆れた表情で空港へ行く為、着替え始めた。

千景と当麻は空港へと足を運ぶ。
空港へ行くと、知っている人物が声を掛けてきた。

「お迎えに上がりました！！ 上条さん！！ 千景くん！！」

「おお、五和か。久しぶりだな　　つて千景くん！？」

「五和！！　どれくらいぶりだ？」

「いやですね、夏休みにそちらに遊びに言っただじゃないですか。千景くん」

「あ！！　そうだったな」

「なんだ、なんだ。お前達、そんなに仲が良かったのか？」

「言ってなかったっけ？　俺、中学の頃　留学と称して天草式にいたんだよ2年」

「2年も！？」

「はいっ！！」

五和はキラキラと可愛らしい微笑みを向けた。

千景はその微笑みにドキッときてしまう。

「お前が来るなんて珍しいな」

「はい！！　一刻も早く、千景くんに会いたくて」

「ほう！？」

「可愛いですね、千景くんは」

完全に浮いてしまった上条　当麻。

千景は少し頬赤くする。

五和はニコッと笑顔を見せた。

「では、行きましょうか」
「行っくてどこへ？」

五和はニコツと笑顔のまま1機の飛行機に指を差した。

「ロンドン行き、超音速ジェット機ですっ!!」

「……………」

千景と当麻はかつてあの死の飛行機に乗った覚えがある。

2は顔を合わせると……

「逃げるが勝ちだっ!!」

「ばっ!! 俺だって!!」

空港内を走って逃げる千景と当麻。

しかし、その不意も効かず

「あはっ!! 無駄ですよ千景くん」

「は……離してくれ!! 五和、俺はまだ死にたくないんだ!!」

「でも、私も乗らないといけないんですから……これでおあいこですねっ!!」

「ほう。私、終。千景はただいまより五和殿の味方で

す!!」

「千景てめええ!! 裏切りやがったな!!」

むしろ向きで叫ぶ当麻。

誰かにぶつかった

その人物

たてみやさいじ
建宮齋字であった。

「おお。上条 当麻久しいな」

「た、建宮!」

「お、千景もいるじゃないのよ。なら、話は早い」

建宮はそう言っていると当麻を担いで千景と五和の前まで歩いていく。当麻は暴れて抗おうとしているが無駄であった。

「くっそ　　!!　　上条さんは……上条さんはまだ死にたくねえ!

「!」

「諦めるなのよ」

「諦めましょう。上条さん」

「諦める当麻」

「ちくしょおおおおお!」

こうして千景、当麻、五和、建宮は超音速ジェット機でロンドンへと向かった。

五和「はい!!　五和です。千景くんとは天草に留学中仲良くさせていたかったです。」

それは、それはよく助けられたものです。あのカメラ
え
っ！？

これはまだ言っではいけないんですか？ はい。わかりました。
次回 第5話 脅威おとめのたか 次回も千景くんのご活躍を願います」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8982y/>

とあるカメラアの絶対零度 アブソリュート ゼロ

2011年11月30日00時56分発行